

第3分科会 進路・学力保障

子どもたちの未来を拓く進路・学力保障をどう進めているか

④分散会

I. はじめに

全人教が重ねてきた進路保障のとりくみについて確認した後、目の前の子どもたちや私たちの10年後、20年後につながる今日や明日をどう保障し、構築するかについて検討していきたいと提起して、報告・討議に入った。

II. 報告および質疑討論の概要

ー報告1ー⑦

一人で抱えるのではなく (福岡県同教)

ー主な質疑応答と討論ー

福岡 自校は経済的に厳しい家庭が多い。40～50%の割合で生活補助を受けている。就学援助の通帳を預かっている学校も多い。高校進学の時のお金が一番困る実態があり、福岡では入学仕度金の支給が6月から3月末におりるようになった。生活実態の厳しさがある。

香川 経済的に厳しい家庭が多く、2人に1人は1人親世帯。香川県独自の就学支援制度がある。
鳥取 生活保護は申請がある。申請をしないといったケースの背景に例えば外国籍の子どもたちは受けてはいけないのではないかと遠慮、説明書が難しいとかそういうことがあるのではないかと心配がある。

福岡 高校の合格者説明会などで、進学説明コーナーを作る学校が増えている。そこでいろんな話が聞ける。入学前から対応していかないとスムーズに高校に通学できないことがある。そこで中高連携でそうした生徒の情報交換を行っている。

ー報告2ー④

ムンバイ日本人学校での実践を通して

(京都市人教)

ー主な質疑応答と討論ー

佐賀 どのように小中の生徒を指導しているのか、危険やガードマンについてどういう状況があるのか。

報告者 小中ともに教科担任制で、毎日7限授業で金曜まで35時間。私だと週30時間程度受け持つ授業があった。ひったくり、テロなどの懸念がある。学校の校門に2人、24時間体制でガードマンがいる。スラム学習にもついてきてもらった。

熊本 Dさんへの向き合い、子どもたちどうしの

向きあい…何を持って向き合ったとするのか？

報告者 家庭訪問で話をしていくということ。子どもたちは保健室での話し合いから関わりが広がっていった。

愛媛 現地の子どもたちとの交流会はやっていたのか。子どもの変容は。Dは子ども食堂に参加していたのか、スタッフか。

報告者 現地のかかなり学費のかかる学校との交流会はやっていた。ムンバイに来たときは、くさい汚い帰りたいという思いだったが、活動を通してムンバイを知るようになってから楽しいと変わっていった。もっともっと知りたいと思うようになった。もう一つの変容はこれから出てくると思う。まず知り感じる。帰国してから日本をリードしていくような人間になる可能性がかなりある。いろんな人たちがいるとわかった上でこれから生きていって欲しいと思う。Dの里親が子ども食堂をやっている。自分がいるから来てくださと呼びかけていた。

福岡 子どもたちはカーストのどこに位置づけられるのか。

報告者 わからないが、日本人は高級住宅街に住んでいるのは間違いない。

福岡 部落問題との出会いは。

報告者 初任校で出会った。先輩から教えてもらって、向き合わなければいけないと思った。

京都 報告者の初任校に勤務していた。当たり前家庭訪問をしていくというシステムで学んでくれたと思う。ムンバイでは全部で6人の職員を巻き込んで実践をしてきた。現任校では40人の職員を巻き込んでやっていくことを目標にしてやって欲しい。卒業した子どもたちが経営者や政治家になって、いろんな人たちがいる、そういうことを考えられる人になってもらいたいという願いや思いがあるのだと思う。

熊本 将来的に子どもたちが自分に向き合えるような取組をされたと思う。自分が差別していることに向き合うということは大切である。

福岡 わたしの部落問題との出会いは、自分の結婚の時の父の差別発言と、学校にいた部落出身の子どもたちだった。家庭訪問でいろんな学びがあったが、その大切さが受け継がれていない。若い世代に家庭訪問の大切さを伝えていきたい。

1日目の報告を受けて

福岡 ムンバイの話聞きながら、かつての部落と重なると思った。私も部落に対して偏見を持っていたが、部落に入り集会所に行きお父さんお母さん達と話す中で私の偏見は消えていった。しかし私の偏見が消えても部落問題がなくなるわけではない。何で偏見があったのか、偏見をなくしていくにはどうしたらいいのかそれを伝えていくことが私たちの同和教育だと思う。ムンバイでも何で貧富の差があるのか、それは私たちの生活に関係ないのか、そこまで考えることができれば

なおよかったと思う。

滋賀 特別支援教育就学奨励費については、私たちが知っておかなければならない制度だと思う。家庭訪問で保護者に説明をするなどの取組をしてきた。ただ、特別支援学校・学級に在籍しないと支給されないなど問題点もある。

一報告3-⑥

共に生きる (兵庫県人教)

一主な質疑応答と討論一

熊本 何が原因で同和問題学習に踏み切れないのか。

報告者 3月に父母の会の役員をお願いするときに関係する保護者に連絡すると、うちは引っ越してきただけ、という答えが返ってくる家庭が増えている。また、ずっと住んでいるけど差別はない、という話をもらったこともある。時間をかけて話をしていかなければならないことなので、踏み込めていない。

兵庫 2002年まで校外学習があった。それがなくなって以来できなくなってきている現実がある。

兵庫 3年生から特別支援学級へ行った子どもから学ばれたことは。

当時の担任 勉強が苦手、人と関わるのがうまくできなかった。家庭訪問をしながら一緒に遊んだりしたこともあった。一生懸命向き合っただけでコソコソ頑張ることが成長につながるのだと学ばせてもらった。

熊本 部落問題が見えているのか？

報告者1 あそこに行ったら危ないといわれたことがあると作文に書いた生徒がいた。その生徒と保護者と話をした。人権学習は必ずしていけないと思っただけ。

報告者2 採用されるまで同和問題はよく分からなかった。先輩から教えてもらう中で知った。

兵庫 進路保障部の取組が成果を上げている。だが中卒後の引きこもりもある。具体的な取組は。

報告者 進路指導員制度というのもあって、卒業後の生徒を進路保障部と同じように追跡する。年数回報告を上げるというシステムがある。進路保障部より関わる時間が長いと思う。

一報告4-⑩

看護師とともに取り組む歯磨き指導 (高知県人教)

一主な質疑応答と討論一

福岡 Aの母が激高されたというあたりを詳しく。

保護者 母も手帳を持っており、支援が必要。虐待傾向の家庭でもあり、地域や関係機関と見守ってきた家庭。小学校に申し送り、地域にも話をした。

福岡 Aの暴言の背景は。

報告者 若くしてAを産んでおり、なかなか母親になりきれない感じがする。Aの下の子に障害があり、母親がAに向けて言っていることをAが覚えた。まずは包み込むことだとAの話を聞いて

ている。

福岡 同和保育所が地元にある。高卒ですぐ出産をして、親として保育所にやってくる。そして自分が子どもの時にされたことを子どもにしてしまう。この連鎖がなかなか断ち切れない、という話を聞く。子の支援とともに親の支援も大切。

福岡 同和保育所を卒業してきた生徒を担当している。その生徒も保育園の時に母親から虐待を受けた。夏休みに保育所へ連れて行ったら温かく迎えてもらった。関わって欲しいという気持ちを持っている。大人の支えが大切だと思う。

報告者 中学校区で0才から15才までを対象に保小中連絡協議会を月1回開催している。つながりを持ち続けていくことが大事だと思う。この地域は隣の人がすぐ助けてくれる。地域のつながりが私たちのつながりになった。教科書無償のたかひをしたときの思いが今も残っている。この地域で人間として大きくしてもらった。それが自分を動かす力になっている。子どもたちには人として生きていく権利がある。

一報告5-⑬

Aさんとの距離を縮めたい (滋賀県人教)

一主な質疑応答と討論一

兵庫 外国にルーツを持つ子は何人くらい在籍しているのか。日本語教室の運営について。クラスでの支援体制について。生活言語と学習言語について。文化の違いや、家庭のしんどさや願いについて。

報告者 今すぐはっきりとは言えないが10人～15人だと思う。日本語教室の先生がいて算数や国語で通級指導を受けている。クラスでの支援は他の職員にお願いしたり、気づいた職員が支援にあたってくれることもあった。家ではポルトガル語の会話が多い、学校では日本語と使い分けをしていた。言葉の壁はあった。自分の気持ちをうまく伝えられないときは担任を頼っている。

福岡 ケース会議をやると、きびしくやった方がいいという職員がいて、どう味方につけるか苦慮している。そうした苦労は。

報告者 いろいろな思いを持った職員がいる。自分の取組もAのためになったのか自信があるわけではない。職員はとても協力的だった。どういうやり方が良かったのかは、今後のAをみていかないとわからない部分もあるのかと思っている。

三重 いろんなことが奪われてきた結果としてこの子の姿があるということをどのくらいつかまれたのか。

報告者 今はそういうことがあったのだということも思っている。学校では私のできることを精一杯した。それ以上のことはまだわからない。

京都 若いときに自分が潰れそうになった。同僚と一緒に勉強しようといって32回高知大会に参加した。仲間や先輩の職員に支えられて出身教師として頑張ってきて今ここにいられる。

－総括討論－

福岡 就学支援の取組を続けている。保護者が書類を見るのが面倒で書類を書かない、申請しないでいいという差別の現実がある。だからこそ丁寧な説明を心がけている。中堅にも若い世代にもしっかりと伝えていく必要がある。皆で勉強する時間を作ってやり始めようとしている。

兵庫 小中高の課題ではなく、学力保障の根は「歯磨き」の取組にあらわれている。学校をネットワークにした学力支援、子育て支援。スクールソーシャルワーカーと連携した取組。子どもが育つ環境が年々しんどくなっている。ワーキングプアを生み出す社会の仕組みがある。学校の先生を取組だけでは前に進まない。保護者の支援を含めたトータルな体制が必要。

兵庫 父母の会の役員をしている。親がしっかりして伝えていかなければならないこともたくさんある。もう差別はない、と言う今どきの親もいるが自分が差別にあってないからそういうだけだ。見渡せば差別はある。地域学習がなくなっているからやっぱり学習が必要だと年8回くらいの講座を組んでいる。

福岡 皆さんの話を聞きながら、やっぱり部落差別はあると思った。部落問題学習では、闘ってきた歴史、奪い返してきた歴史も教えないといけない。こんな風に育てられてきたんだと分かったら、ただ単に荒れてるなという捉え方ではない捉え方ができる。ムラのお父さんお母さんにとりあえず飯の食える仕事につけてくれ、そのために高校にやっただと言われた。ぜひ高校に進学して欲しい。

兵庫 西宮の進路保障部はすべての高校から職員が参加している。夏休みに学習会をしている。保幼小中高、ハローワークの方も参加していて校種を越えて子どもたちをどう育てるかという話ができる。

鹿児島 進路保障をしていくのは、子どもたちの人権問題だからだ。安心安全な場所を作ってあげるのが大事と今日学んだ。不登校の子どもたちと関わってきた。教育は「今日行く」ことだとやってきた。

三重 四日市は中学校区単位で保幼小中の職員で集まって校区の子どもたちを育てていこうという枠組みがあり取り組んでいる。